Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2003.7
発行者：中島秀雄
事務局：畑文夫
編集部：荒井崇

NO.25

CONTENTS

・ マイケル・ケンナ トークショー （報告と考察）
・ 日光撮影会について
・ 原直久先生講演会
・ 写真収集家の気ままな散歩（２）－プリントの保存
・ ゾーンシステム研究会定例会日誌
・ インフォメーション

マイケル・ケンナ トークショー（報告と考察）

中島秀雄

東京写真文化館でマイケル・ケンナ写真展（レトロスペクティブ　記憶の中の時間）に合わせ、サイン会とトークショーが行われた。

マイケル・ケンナについて知ったのは、15 年ほど前に写真集を見たのが最初だった。イギリスの写真家ビル・ブラントが撮影した工場が見える石畳の坂を同じアングルで撮影した写真や、原発の煙突とそこから湧き出た蒸気の流れを撮った写真を記憶している。
同じ場所を同じアングルで撮影することの意味は何か、原子力発電所が様々な問題を抱え始めていたときに原発の煙突を撮る意味は何か、私は、彼のテーマがどこにあるのか分からないまま時間がすぎてしまった。その後、いくつかのギャラリーでマイケルの展覧会が開かれ、そこにはビル・ブラントを真似た写真もなければ、原発の写真もなかった。イギリス郊外の霧に包まれた林の写真や、フランスの公園の写真が印象に残っていた。ハッセルブラッドに４０mmのレンズを愛用し、パースペクティブな視覚と正方形の写真からはモダンなデザインセンスと真面目さを感じていた。しかし、これらの写真からは、私が学んだアメリカ西海岸の写真スタイルとは少し違っていた。

写真家への道

大きな家庭で育ち、遊ぶのはいつも一人。近くに住む神父さんが、ときどき自分の相手をしてくれたことが神学校の寄宿生活に進むことになる。やがてデザインに興味をもちデザイン学校に進み、コマーシャル写真の世界に強く引かれていく。ロンドン芸術学校では写真の高等国家免状を取得している。その後、コマーシャル写真家のアシスタントへ進んでいった流れを語った。

コマーシャル写真家のアシスタントになったことが、その後のマイケルの写真に大きな影響を与えたようだ。コマーシャル写真の現場は物を確実に捉えることが仕事で、ブレやボケ、画像の歪みや変形はタブーになっている。要は正確さが要求される世界だ。また、写真家のアシスタントは修行の時代あり、自由な時間をつくることは難しい。時間を作るとなると仕事が始まる前の早朝か、仕事が終わった夕暮れの時間か、夜しかない。マイケルの写真の多くは光が差し込まない早朝や、イギリス独特の霧がたなびく時間帯、日が落ちた夕暮れの柔らかな光が自分に与えられた唯一の光りとして捉えていたように見える。霧や闇を通して眺めた森や人のいない公園に、彼は霊を感じるといっている。彼の写真の中心軸は、光りの粒子と大気が交じり合うことで日常性を薄め、非日常の世界（彼はそれを神秘の世界といっている）を見ていたようだ。原発の煙突に流れる蒸気の写真も、原発が抱える社会的な問題に関心があるというより、霧の中に立ち現れる巨大な構築物とそこに流れる蒸気とが光の粒子と交じり合う、神秘的な空間として眺めていて、彼の話の中から社会的な問題と関連づけるものは何もなかった。

同じアングルで撮る意味

かつての巨匠達の現場を同じアングルで撮影した写真についてマイケルは“同じ空間を撮影しても同じものは撮れない”と言っている。ビル・ブラントの撮影した煙突のある石坂は、イギリスの階級社会をテーマにしたもので、労働者が踏み固めた石畳と毎朝眼にする工場への坂道をイメージした写真になっている。マイケルの同じアン

グルの写真は、都市空間のデザイン的な眺めとして捉え、夜間に撮影することで非日常的な美しさとして眺めている。同じ場所を捉えたからと言って、テーマが違えば、まったく違った写真になることを教えてくれる。フランスの写真家アジェをまねた公園の写真は、真似たというより、人工物と自然とを関係づけるというテーマのなかから必然的にアジェに似たアングルがあるにすぎない。アジェのテーマは、造園家が作った公園という商品を正確に記録することが大きな目的で、内面性や社会性を極力排除し客観的なまなざしで捉えることに集中している。それに対してマイケルの公園シリーズは、人工物と自然との融合とか接点、バランス、調和、視覚の発見といった視点に拘り、結果としてヨーロッパの陰影にたなびく粒子にいつか我々の目が引き込まれ、癒されるような忘れがたい魅力となっている。

どこまでも見通しのいい光りの中で捉えたアメリカの風景写真と、湿り気のあるヨーロッパの光りの中で捉えた写真との違いもここから見えてくる。

マイケルの暗室ワーク

研究会写真展見学で検証したように、プリントをよく見ていくとプリントテクニシャンとしてのマイケル・ケンナが見えてくる。堤防、砂浜、海、空へと連続する写真は、全体を浅焼きにして海、空を強く焼きこみコントラスト調整することで、そこから日常性が消え、非日常性が見えてくる。歴史的建造物をモダンなイメージに見せるテクニックも、暗室ワークによるところが大きい。また長時間露出で撮影された写真に数羽の鳥が写し止められ、異なる時間と空間表現は暗室テクニック以外考えられない。しかし、細かな暗室テクニックにも限度があり、荒削りなところも見える。

様々な表現の可能性を試みるマイケルが大きなプリントを作らない理由もここにあるのかもしれない。

私は、マイケルの写真の中でも海の写真が好きだ。月の光りや早朝の陽が登る前の時間帯を選び、数十分から数時間の露光の中に現れては消えていく光りの陰影のすべてを吸い取っていく行為のように見える。人間の目では捕らえられない時間の厚みと光の物理現象を捕らえるカメラの役割と、そのことを経験から感じ取った写真家の役割とのみごとな調和をこれらの写真から感じるのだ。

アシスタントの時代に得た早朝の光と影がマイケル・ケンナの写真の中心軸になっていて、その中心軸にはいささかもブレがないことをこの写真が証明している。

日光撮影会について

石井政吉

2月15日朝私は、東武日光駅で当日着の会員の方々と共に、前日から来ていた中島先生を始めとする先発会員の皆さんと合流し、最初の撮影場所である霧降高原で撮影を始めました。今年は去年に比べて雪が少なく、雪を生かした作品を作るのは難しいと思いましたが、そのような状況でも、皆さん努力して作品制作にとりくんでいました。

次に向かった撮影場所は寂光の滝で、水の流れを生かした作品制作に挑む事になりましたが、良くも悪くも流れが強く、良い足場を確保しつつ撮影をしていくのは困難でしたが、皆さん工夫しながら作品制作に挑みました。その後裏見の滝に撮影場所を変え、途中アイスバーン状態の歩道に苦労しながらも到着してみると、冬にしか見ることが出来ない、滝が凍って出来た巨大な氷柱がありました。つい撮影に集中するあまり、私を含め一部の会員が集合時間に遅れると言う失態を演じてしまいました。

その後、菖蒲が浜付近の撮影が終了した頃にはすっかり日も落ちて暗くなり、宿である湯の湖にある湯の家旅館へ向かうことにしました。夜は、今回の撮影会の課題でもあるポラロイド社のタイプ55フィルム使用方法の講習会となりました。私としては、講習を聞いていて大変便利で粒子の細かい良いフィルムだと思いますが、フィルム感度が低く、この感度のフィルムしか選択肢が無い為、室内の静物撮影には良いと思いますが、やはり野外や動きのある被写体には向かないと思いました。

部屋に戻った後、同室の菊池さんと話しているうちに、お互いが使用しているスポットメーターが同機種で、同じモディファイド済みであるはずなのに一絞り半も違う事が分かりました。中島先生の部屋へ行き伺ってみると、どうしてもやはり機械なので使用しているうちに狂いが出てきてしまう為、常に自分のデーターを取って行く必要があると改めて教えていただきました。

2月16日は、朝食の前に湯の湖付近で撮影をしていましたが、だんだん雪が強く降ってきてしまいました。朝食後予定を変更し、前日の夜に続いてタイプ 55 フィルムの講習会の続きをした後、宿をチェックアウトし、湯滝付近で撮影していましたが、雪は相変わらず強く降っていました。

そして、その後解散し、撮影会は終了となりました。今回の撮影会は、雪不足、悪天候などの不利な条件もありましたが、参加された皆さんにとって色々得るものがあった撮影会だったと思われます。

原直久先生講演会

荒井崇

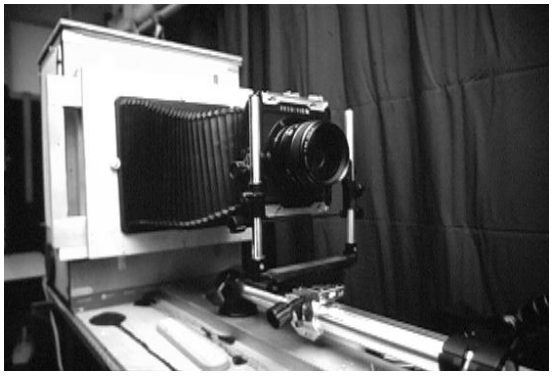
２００３年２月２日（日）、研究会総会終了後、原直久先生の講演会が行われた。

原先生は、日大芸術学部写真学科の教授であり、ギャラリーPGI 立ち上げ活動にも参加され、中島先生とは古くからの知り合いである。

原先生は、日大写真学科の学生時代、アルバイト先の広告代理店社長に付いて回って風景を撮り始める。この社長は大の風景写真好きであったが、車を運転できなかったため、原先生を連れて撮影に行ったとのこと。常々スタジオ撮影が多かった大学の授業に比べて、天候をどのように利用するかがポイントになる風景撮影は、新しい世界に触れたような気がしたという。

その後、アジェの風景にあこがれるようになり、パリへ撮影に行くようになる。当時原先生はヘミングウェイも大好きで、パリは、ヘミングウェイが若い頃過ごした土地であることも影響したようだ。カメラは、このときから既に８ｘ１０を使っている。

原先生は、この頃から撮影のためにアジェを勉強し始め、今では、アジェの研究では第一人者である。



以下、原先生の撮影／暗室技術の特筆すべき点をまとめてみた。

（１）実効感度

露光時間を変えたネガをコンタクトプリントし、最大黒のところで感度を求める。ちなみにシートＴｒｉＸ（ISO３２０）はISO１００、ただし同一種類のフィルムでも、フォーマットが変わると（例えば３５mm）感度も変わるという。私たちのゾーンシステムとほぼ同じ手法である。

（２）シャドーマスク

原先生は、コントラストの高い被写体を撮影したとき、マイナス現像（現像時間を短くする）を行ってネガのコントラストを下げる。私たちゾーンシステムと全く同じ手法である。

しかしながらマイナス現像にも限界があり、一般的にネガの良好な状態を維持できるのはマイナス２現像（２絞り分）までと言われている。それ以上に被写体のコントラストが高く、シャドーやハイライトのトーンが十分に出ない場合は、一般に覆い焼きや焼きこみを行うが、木の枝などハイライトとシャドーが交錯する被写体等はそうはいかない。

そこで原先生は、シャドーマスクという独自の覆い焼き手法を使っているそうだ。その方法は以下のとおりである。

１．暗所で、現像した原版フィルムとマスキングフィルムを重ね、両者がずれないように位置決めする。位置決め方法としては、印刷用レジスターパンチで両方のフィルムに位置決め穴をあけ、印刷位置決め用治具（大日本印刷製がよい）の軸にその穴を通して固定。（マスキングフィルムはコダック製「パンマスキングフィルム」を使用している。ただし今は８X10 しかないはず。）

２．２つのフィルムを重ねた状態で露光する。（露光の目安は、台板上０．５ルクスで０．５－１．０秒）

３．マスキングフィルムを現像する。（D７６で３分位）

４．印刷位置決め用治具で原版フィルムとマスキングフィルムを位置合わせして重ね、プリントを行う。

（印刷位置決め用治具の位置合わせは完璧でないので、更に目視で微調整を行う。）

（３）暗室用装置関連

・引き伸ばし機は TOYO ビューカメラを改造した自作横置き型。

・印画紙サイズによる露光換算表を作成して、引き伸ばしの露光時間を決める手助けにしている。

・印画紙フラットニングはドライマウントプレスを使用。２ply のミュージアムボードに印画紙をはさみ、180° F にて３０秒プレスする。

・販売用作品をプリントするときは、必ずアーティストプルーフを余分にプリントし、保管しておく。

（アーティストプルーフとは、プリント保証証明のようなもので、基本的には販売用作品と、同一日、同一条件でプリントしたものを、作家自身が最適温湿度環境下で保管しておく。そして後年、作品購入者からのプリント劣化クレームがあった場合、アーティストプルーフと比較して対応するものだ。）

・プリントウォッシャーは、必ず泡の出るもので水洗する。

（４）プラチナプリント

原先生は、プラチナプリントも実践している。プラチナプリントは引き伸ばしができなく、紫外線でコンタクトプリントを行う。原先生は、シール社ドライマウントプレス機を改造して自作した焼付け機を使用。また、印画紙は加湿器で湿らして使用するとのこと。プラチナプリントは、湿気で黒の調子が変わるという大変デリケートなものであるそうだ。

また、印画紙現像は、現像液に浸すのではなく、プリントへ現像液を一気に注ぐ方法で行う。これまた大変手間のかかる代物である。

今回原先生の作品は、スライドとオリジナルプリントで見せていただいた。アジェの足跡をたどって撮影されたパリの情景や、イタリアなどヨーロッパでの作品が多い。さすがにプリントのクオリティーは絶品だ。到底トーンの出せないような

輝度差の大きい被写体を、いとも簡単に、美しいプリントへ仕上げてしまう。シャドーマスク技術のすばらしさに、息を呑む連続であった。

作風は、シュールな光景をみごとに捕らえたもので、アジェの影響をほのかに感じるものである。

ところで原先生は、フィルムホルダーへの詰め替えを、旅先でも全暗室で行う。ほこり対策のため絶対にダークバックは使わないそうだ。ホテルではバスルームを遮光して使う。ホテルを選ぶとき、まずバスルームの遮光状態をチェックするので、いつもホテルマンには不思議がられるという。

原先生の数時間にわたる講演会は、非常に内容が豊富なものであった。私たちゾーンシステム研究会会員にとって、大変有意義なものであったに違いない。

写真収集家の気ままな散歩（２）

－プリントの保存

荒井崇

今回は、プリントの保存について考えていきたいと思います。

収集したプリントをいかに保存するか。これは意外と大変なことで、手間のかかるものです。しかしながら、著名な写真家のプリントはもちろん、ご自身の作品も決してないがしろにしてはいけません。「自分の作品はいつでも焼ける。」という考えは捨てていただきたいと思います。今後、銀塩写真の感剤はいつまで手に入るかわかりません。感剤が全て無くなってしまうことは無いにしても、製造メーカーや感剤の種類が減っていくことは明らかです。もしかすると、明日、あなたの愛用していた印画紙が無くなるかも知れないのです。二度と同じトーンのプリントが焼けなくなるかもしれないのです。

私の経験によれば、プリントの保存で重要なことは、以下３項目に尽きると言えます。

１．合い紙でプリントをサンドイッチする
２．空気を遮断する
３．ストレッジボックス（無酸性紙の箱）に保管する
４．湿気を防止する

１．合い紙でプリントをサンドイッチする

合い紙でプリントをはさむことにより、空気中の有害物質を合い紙が代わりに吸ってくれます。これによってプリントの保存性が格段に上がるのです。明治大正期の写真で状態の良いプリントは、アルバムに合い紙をはさんで密着していたものが多いことからも、合い紙の効果がわかります。ただし、合い紙は無酸性紙をお勧めします。合い紙が酸化すると、それがプリントに乗り移ってしまうのです。無酸性の合い紙は、さまざまな種類がありまして、ＰＧＩ（フォトギャラリーインターナショナル）に行けば手に入ります。代表的なものは、アポロティッシュなどです。

合い紙の使い方ですが、ブックマットをした場合は窓枠とプリントの間にはさみ込みます。（図１a）もちろん額装して展示するときは、合い紙をはずすことになりますので、長い期間の展示は避け、写真を入れ替えるようにしてください。当然のことですが、ブックマットに使用する材料やテープは、毎年研究会の写真展で使用しているようなアーカイバルのもの（保存性を考慮したもの）を使用することが必要です。

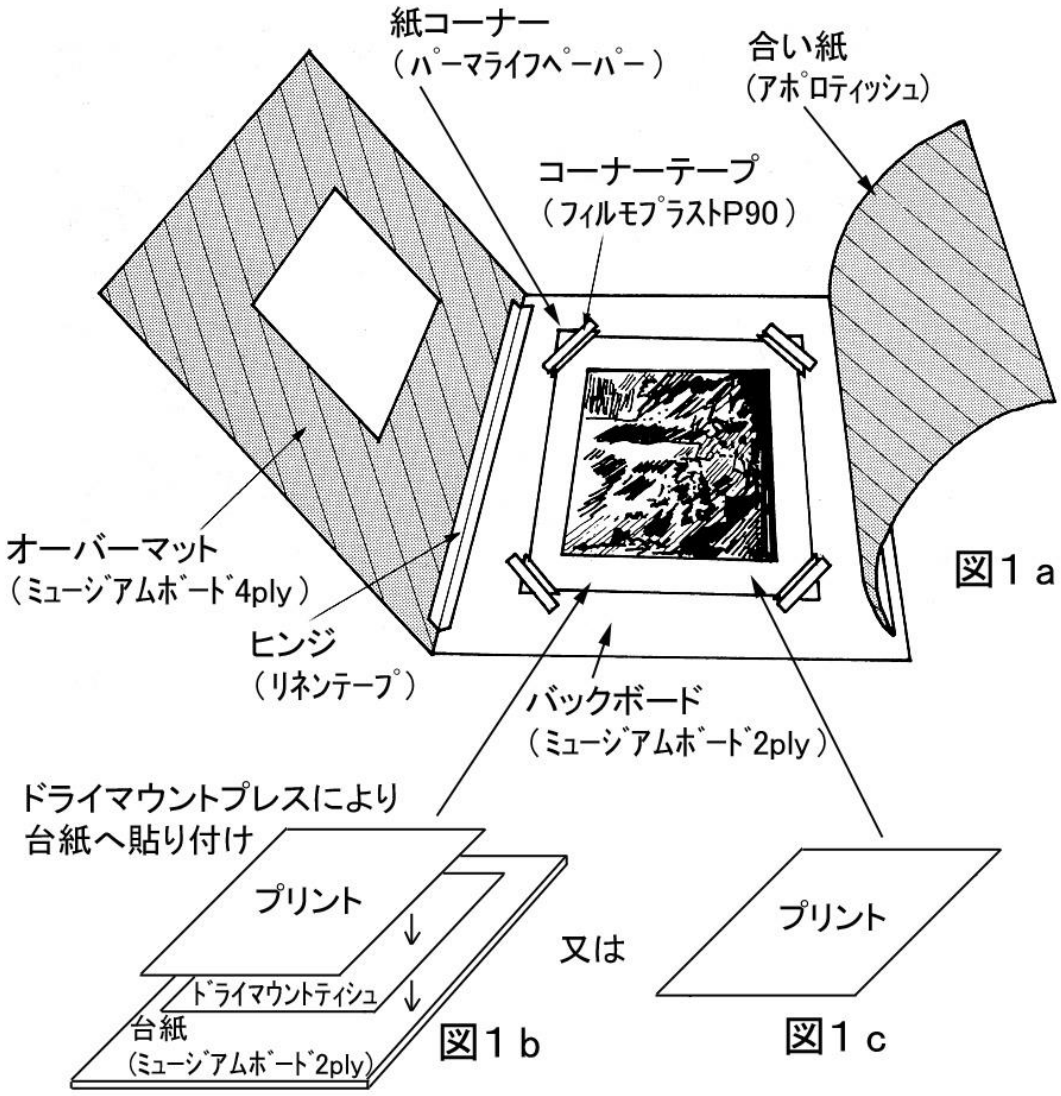
（ブックマットの方法に関してまだご存知ない方は、最後の項で説明してありますので参照してください。）

次に、ブックマットをしないで保存する場合ですが、基本的には合い紙でプリントをはさみます。ここで注意していただきたいのは、合い紙からプリントがはみ出した部分は保護されませんので、はみ出した部分からプリントの劣化が始まります。よって合い紙は、プリントより一回り大きな寸法のものを使って、端辺を折るなど、はみ出さない工夫をしていただくとベターです。（図２a）

なお、本当に重要なプリントは、合い紙を２枚重ねたり、厚い合い紙を使用することをお勧めします。これにより、更に保存性が高まるのです。

２．空気を遮断する

前述したように、プリントは空気中の有害物質に影響されるので、できるだけ空気を遮断したほうが有利です。



空気を遮断する場合もっとも簡単なのは、合い紙ではさんだプリントやブックマットを、ポリエチレンやポリプロピレンの袋へ入れておくことです。ただし、塩ビの袋は厳禁。中島先生の話では、塩ビ自体が有害ガスを出してしまうからだそうです。

もうひとつ注意して欲しいことは、ポリエチレンやポリプロピレンの袋へ入れても、入り口付近は空気に触れやすいため、先に劣化して行きます。この対策としては、長めの袋を使用して先端を折る。（図２ｄ）２枚の袋を使って両側から包み込む。（図２b）ファスナー付きの袋を使う。などが有効です。

なお、究極の空気遮断方法は、ラミネートやパウチを行う方法です。ただし、あまりにも樹脂と印画紙が密着しすぎるため、このときも、合い紙ではさんだ状態にて行うことをお勧めします。密着しすぎて樹脂の表面に印画紙が張り付き、（この現象を移行と呼びます）印画紙表面が痛む場合もあるのです。

３．ストレッジボックス（無酸性紙の箱）に保管

する

合い紙ではさみ、ポリエチレンやポリプロピレンの袋に入れたプリント／ブックマットを保管する箱は、ストレッジボックス（無酸性紙の箱）がベストです。空気中の有害ガスを吸ってくれるし、酸化しにくいので、プリントへの影響も少ないのです。これもPGI（フォトギャラリーインターナショナル）で入手できます。組み立て式でサイズも豊富ですので、とても便利なものです。

４．湿気を防止する

プリントは、湿気によって変色したりカビたりします。すぐ思いつくのは防湿庫ですが、大きなプリントを保管するにはかなり高価な防湿庫が必要で、一般家庭ではかなり難しいと言えます。そこで私は、プリントの入ったストレッジボックス（無酸性の紙の箱）を、大きなポリエチレンやポリプロピレンの袋に入れて密封しています。そしてこのとき、必ず調湿剤を入れます。調湿剤とは湿度を一定にする薬品で、私は富士フィルム製のキープウェル（ヨドバシで売っています。価格７００円前後）を使っています。また、密閉の方法は、ファスナーの付いている袋がベストです。（布団の圧縮用ファスナー付き袋など）あまり大きいものが無い場合は、袋をテープで密封します。このとき、テープの糊に有害な化学物質が含まれてないものが良いのですが、何がよいかまだ私にもわかりません。とりあえずテープ糊の匂いがきついものは避けています。

なお、プリントは、湿気から守るために密封すると同時に、時々空気にさらしたほうがよいという話も聞きます。１年に１回くらいは、調湿剤を交換するついでに袋から出すとよいでしょう。

以上、プリントの保存について述べてきました。完璧な保存方法でなくてもかまいません、まずはできる範囲でやってみていただきたいのです。そしてまずは、あなた自身の作品から始めてください。あなたのすばらしいプリントを後世に残すことは、大変重要なことなのです。もちろん、コレクションした作品のほうもお忘れなく。

なお、もっとよいプリント保存のアイデアがありましたら会報に載せたいと思いますので、ぜひ会報編集者（荒井）までご連絡ください。

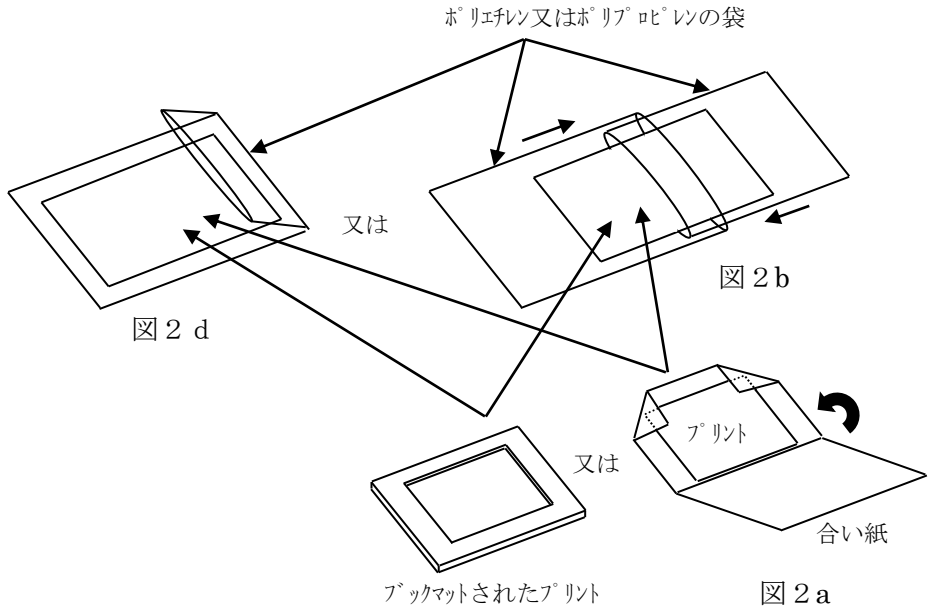


図２ｃ

参考１：ブックマットの方法（概要）

ブックマットするプリントは、プリント単体（図１c)、あるいはプリントを台紙へ熱で貼り付けたもの（図１b)の２種類方法があります。プリントを台紙へ熱で貼り付ける方法は、ミュージアムボードと呼ばれる無酸性紙（厚みは２種あり、2ply は 0.8mm、4ply は 1.5mm）に、ドライマウントティシュと呼ばれる熱で接着する両面テープのようなものを介して熱でプレスし、接着します。このときドライマウントプレス機と呼ばれる大型のプレス機が使われます。このやり方は平面性が良いので、アンセル・アダムスが好んで使用しましたが、「台紙が先に劣化するので良くない」という説、「台紙への接着により有害物質が印画紙に入りにくいので良い」という説もあり賛否両論です。ちなみに私たちゾーンシステム研究会では、平面性の観点からこの方法を使って展覧会を行っています。

次に、オーバーマットと呼ばれるミュージアムボードに窓枠を開けたものと、バックボードと呼ばれる同一外形のミュージアムボードを、リネンテープと呼ばれる水貼りテープでヒンジを形成します。このときオーバーマットは厚手のもの（4ply)、バックボードは薄手のもの（2ply）を使うのが一般的ですが、特に決まりはありません。ただし、厚みの異なるミュージアムボードでヒンジを貼るとき要注意。薄手のミュージアムボードの下にもう一枚薄手のミュージアムボードを敷き、段差の無い状態で貼らないと、ヒンジ部に余りが出てしまい、閉じたとき２つのボードがずれてしまいます。

更に、パーマライフペーパーと呼ばれる紙を切って折り曲げて、三角コーナーを作り、フィルモプラスト P90 と呼ばれるコーナーテープでプリントを固定します。

そして、展示を終えて保管するときは、アポロティッシュと呼ばれる合い紙をはさんで２つのボードを閉じます。

なお、現在ゾーンシステム研究会の展覧会では、プリントを台紙に貼り（図１b)、バックボードを使わず直接オーバーマットへ貼り付けています。また、合い紙も使っていませんが、厳密に重要なプリントを保存する際は、やはりバックボードと合い紙を使うことをお勧めします。

参考２：材料・機材の入手可能な業者

（１）ボード、テープ、ＢＯＸ等

・ＰＧＩ（フォトギャラリーインターナショナル）（田町）
TEL:03-3455-7827　FAX:03-3455-8143
http//pgi.ac
通信販売も行っていますので、地方の方も利用できます。

・東京写真文化館（赤坂見附）
TEL：03-3505-2335 FAX:03-3505-0288
http://www.tpcc-akasaka.com/index.html

・ライトワークス（横浜）
TEL:045-450-5045　FAX:045-450-5046

注）ただしドライマウントティシュは国内で販売されてませんので、アメリカの業者へ発注して手に入れます。
（取り扱い業者：カルメットホームページ
http://www.calumetphoto.com/）

（２）ドライマウントプレス機
銀一またはカルメット等で手に入ります。

ゾーンシステム研究会定例会日誌

2003年3月16日(日)　　記録：荒井崇

・出席者：中島先生、田中肇、田中英司、岡崎、山本、橘田、松本、鈴木、圓子、荒井、畑、山口、佐野、北野、市川、古川

・作品持参者：田中英司、橘田、松本、畑、鈴木、北野、佐野、市川、岡崎

・市川氏のプラハ撮影旅行談
何と旅行費用５８０００円也。(冬なので安い)
予想以上に寒くて撮影困難。
街はとても安全で、三脚を立てて撮影ＯＫ。
古い建物がかなり残っていて格好の被写体あり。

・古川氏より、カメラショーの感想
ペーパー水洗機（軽い)、縦型コンパクト印画紙現像容器（ラッキー）が良かった。
ただし非常に高価。

・中島先生より、アメリカの定期購読紙を紹介された。
「LENS WORK」インターネット申し込み可。
モーリー・ベアー、オリバー・ギャグリアニなどＵＳＡの写真家が紹介されていた。
オリジナルプリントの誌上販売も有り。

2003年4月13日(日)　　記録：中島秀雄

・出席者:中島先生、田中肇、田中英司、岡崎、山本、橘田、小野、松本、鈴木、圓子、古川

・作品持参者:田中英司、橘田、小野、松本、圓子

・中島先生より報告
ポラロイドによる　”プレ・エクスポージャー”サンプル写真。現像コントロール不可能なポラのコントラスト調整方法として、アダムスはプレ・エクスポージャーを奨めています。
　第一露光の後、アクリル板をレンズにかざし、第二露光をする。
　全体に若干のカブリをあたえることで、シャドーを補い、結果としてコントラストを下げるもの。研究する意味あり。
　ポラロイド社がモノクロ普及のために新しいパンフレットを作る予定。私が少し手伝うことになりました。
　プラチナプリント、鶏卵紙プリント、サイアノタイププリント、他、のような技法を駆使して作品作りしている人を紹介してください。

・八丈島撮影会の件田中薫さん報告。
ホテルの決定。
現在６人参加、山本さんが参加希望。合計で８人。
レンタカーは２台予定

2003年5月24日(土)　　記録：荒井崇

・出席者:中島先生、菅野、古川、畑、松本、荒井、田中（肇)、田中（英)、木下、石井、宮岡、山下、圓子、鈴木、北野、橘田、岡崎、常見（見学者）

・作品持参者:古川、畑、松本、田中（肇)、田中（英)、石井、圓子、鈴木、北野、橘田、岡崎

　今回の定例会は八丈島撮影会後ということもあり、多くの会員が力作を持参し、とても有意義な定例会となった。今年は展覧会用の作品が早く集まりそうである。

作品講評会での主なコメント

・北野さん・・・ネガの右端に光線漏れのような現象あり、カメラの光線漏れチェックが必要。晴天下にてレンズを閉めたままバルブにし、５分、１０分・・と時間を変えて撮影し、ネガに光線が漏れていないか確認するとよい。

・松本さん・・・静物写真のバックをもう少し工夫するとよい。

・石井さん・・・プリントが暗いので、もう少し最適な露光が必要。ISO テスト用ネガを持参したが、露光ミスあり。再度テストを行う。

・作品全体に関して、中島先生よりコメント。

フレーミングの際、一旦、全体を撮影してみてから部分を切り取ることを考えることは有効な手段である。

空に関して、空間の捕らえ方に注意。

（注）八丈島撮影会の詳細については次号に掲載予定。

2003年6月21日(土)　　記録：田中肇

先生が欠席されたので、私（田中）が司会を行いました。

・出席者:松本（11 時の役員会に出席したのは松本さんだけでした。）、古谷津（仕事忙しく２月の日光撮影会以来久しぶり出席。）、橘田、圓子、北野、木下、山本、宇野、石井、田中肇、山下、菅野、新しく入会希望の常見藤代さん（用事あるとかで早く席を立たれました）

・作品持参者：石井、北野

１．最初の議題は写真展について、7 日にするか 10 日にするか。

色々話し合ったが、7 日でよいのではないかということで落ちつきました。

来てくれる人はだいたい 7 日以内に来てくれるのではないか。アサヒカメラなどに乗せてもらうためには、パブリシテイを早く送る必用があるのでは……。など意見がありました。

時期については、パーテイを土曜日（29 日？）に開くつもりで搬入日、搬出日を決めたらどうかとの指摘がありました。ということで中島先生日程を決定してください。

初めて出品予定の人もありスケジュールや段取りを説明しました。

出品作品の申請と評価は次回の例会あたりからそろそろ始ると思いますと答えておきました。

次回月例会で、展覧会のスケジュールを発表してください。

２．静物撮影会（7 月 5 日）

日程と場所は決まっていることであり、どんな内容にするかということでは、特に何を撮影したいということは無かったです。静物の撮り方、並べ方、ライテイング等を学びたいとのことでした。

時間が会場を 5 時には片付けて空けなければならないので、あっという間に終わるという意見があり、船橋の施設で夜 9 時くらいまで使える所(無料）があるとかで、次回の会場として検討することにしました。

出席者予定者は、古谷津/橘田/北野/木下/宇野/石井が手を挙げました。

7 月 5 日で日が迫っていますので、次の 7 月例会の予定とあわせてメールあるいははがきで通知する必用があると思います。(畑さんにお願いします)

３．暗室ワークについての質問がありました。

時期は未定ですが、早ければ 7 月末、多分 8 月

初旬でしょうと答えました。
　これも日程を早く決めてしまった方がいいと思います。８月例会との兼ね合い、先方（写大室？）の都合もあると思いますが……。
　今回は大判とのことだがどの程度か？との問いには多分印画紙で 14×17 サイズ、我々の写真展の定型額サイズ 18×22 に入る範囲での最大サイズでしょうと答えました。

４．その他の話題では、最近見た写真展の情報交換、最近のデジタル写真事情などにも話題が発展しました。
　数えてみれば、会員の中のかなりの人がデジカメをすでに遣っているようです。かなり入れ込んでいる古川さんや山下さんなどもいます……。もちろんデジタルに手を出すつもりのない人もいるわけですが……。いろいろ話を聞くのは面白いです。結構盛り上がった話題でした……。
　また他に、会員同士の横の繋がりをもう少し発展させられないかなどの意見も出ました。

５．プリントを持参されてこられた人もいたので、相互批評を行いました。
・石井君：前回の焼き直しを３カット持参。今少し工夫必用とはげましました。
・北野さん：前回は焼きカブリが問題でしたが、カメラの蛇腹を検査したら、光線もれが発覚！タチハラに持ち込み蛇腹交換し一件落着した由。引き伸ばし機の方は問題ないだろうとのこと……。今回ははるかに良いプリントを持参。ところが今度はフイルムの現像ムラ？あるいは傷があり、新たな課題を発見……。

　時間がちょうど５時になったので散会しました。

Information

【トピックス】

石原さんがギャラリー・スペースをオープン

休会中の石原さんがギャラリー・スペースをオープンしました。

【売ります】

中島秀雄

・ジンマーS 210mm f5.6

レンズボード無し

口径の大きなレンズで、8x10も少しカバーします。

30000円

・4X5 引伸機 富士 45A

サビはなくきれいな物、レンズ付き。

60000－70000円

・ゾーンVI 8X10 カメラ

298000円

・アポシロナーW210mm f5.6 ｲﾒｰｼﾞｻｰｸﾙφ355

265000円

赤羽章司

・ＧｒａＬａｂ暗室タイマー

AC電源100V50Hz用

（地域によっては60Hzのところもありますので電力会社に御確認ください。）

10000円

【買います】

荒井崇

・ドライマウントプレス機（SEAL 社に限る）

半切サイズ（160M）又は小全紙サイズ（210M）

（状態の良いもの希望）

購入希望価格：半切サイズ 50000 円前後

小全紙サイズ 70000 円前後

中島秀雄

・PCニッコール 28mm f2.8

70000円前後

Information

【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

［以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしくお願いします。］

1．写真原稿は、紛失事故防止のためできるだけネガやポジは避け、プリントでお願いします。
2．手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。
   ・ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの、（スキャナーでパソコンへ入力しますので、文字高さ実寸４ｍｍ以上で御願いします。）
   ・パソコンの電子メール
   ・ウィンドウズの Word2000
   ・text ファイル
   （ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2000 で作成しています。）
   ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に連絡をいただくようお願いします。
3．イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

パソコンの扱いが不慣れのため、時々ご迷惑をおかけするときがあるかと思いますので、その際はよろしく御指導ください。

［編集部］　荒井　崇